

JSOG Newsletter

# Reason for your choice

No.22  
April  
2018

わたしたちの医療は「新しい生命」を生み出すためのものです。ひとつでも多くの生命の誕生のために。すべての女性のために。いま、わたしたちができることを...

公益社団法人 日本産科婦人科学会  
JAPAN SOCIETY OF OBSTETRICS AND GYNECOLOGY

## 産婦人科サブスペシャリティ 女性ヘルスケア編

# その道を選んだ先輩医師からみた魅力



### はじめに

弘前大学を卒業後、産科婦人科学教室に入局しました。当時は今の研修医制度はなく、大病院や関連病院で研修医のような勤務をしたことになりません。3年半ほど関連病院で過ごした後、大学に戻り、学位を取るために生化学教室に通いました。昼まで産婦人科の外来や病棟の仕事をして午後から(手術あるときには終わって)生化学教室で実験をするという生活を続けました。当時通っていた生化学教室第一では、教室を挙げて細胞外マトリックスの研究をしていました。ここでは子宮頸管癌の生化学的メカニズムの研究をしました。途中から皮膚線維芽細胞を使い老化と女性ホルモンの関係を調べ、こちらで学位授与となりました。

### 女性医学との出会い

大きな転機となるのは、平成13年、弘前大学の産婦人科前教授の水沼英樹先生が着任された時からであります。水沼先生は、もともと生殖内分泌(不妊領域)を専門とされていた方であり、周産期、婦人科



2012年、第64回日本産科婦人科学会シンポジウム(中年に対する女性医学の展開)終了後、演者、座長の先生方と(左から3人目筆者)

### 日本女性医学学会の誕生と女性医学の認知

平成23年には、思春期から老年期までの女性の包括的医療を担い、治療だけでなく予防医学も行うという活動内容に則して学会名称が日本女性医学学会に変わりました。日本産科婦人科学会における認知度も急激に変化しました。女性ヘルスケア委員会が設置され、女性ヘルスケア部門としてのシンポジウムが日産婦総会学術集でも開催されるようになりました。平成26年には女性ヘルスケア専門医が正式にサブスペシャリティとして承認され、産科婦人科学の4番目の領域として認知されるに至りました。日本女性医学学会では、ここ数年は、会員数が年約10%増加しています。これも認知度と社会からの需要上昇の側面の一つかもし

### おわりに

保健学科に職場が変わり、女性ヘルスケアの分野では看護学生や大学院生と研究を進めています。昨年産婦人科学講座の教授に就任された横山良仁先生、女性医学へのご理解のもと大病院でも従来通り女性ヘルスケアの診療や研究を支援してもらっています。以前からの健康維持外来(更年期障害、骨粗鬆症、骨盤臓器脱など)を継続して行うのみならず、腫瘍外来と治療後の骨やQOL、不妊カップルのメンタルストレスの評価、また大学を挙げて行っている大規模住民コホートでの「母子手帳と将来の生活習慣病の関連」など、他の3分野と有機的に繋がるといふ女性医学の核心とも言えるような活動に携わることが出来る

おり、産婦人科教室の面々には感謝しています。病気の治療はもちろん大切ですが、その前に(予防)、その後に(QOL)を考える産婦人科の専門領域が何であれ、結局は女性医学に到達せざるを得ないと確信するとともに、女性医学的な考え方は若いうちから身に付けることが大切だと思つていきます。



樋口 毅  
弘前大学大学院 保健学研究科  
看護学領域  
卒後31年目  
趣味 史跡探訪、ペランダ菜園

▶全文はWebサイトに掲載しています。ぜひご覧ください！

## 「Plus One Project 未来の産婦人科医育成セミナー～全国の若手医師と交流しよう～」(POP2セミナー)開催報告

2017年5月に第1回目のPOP2セミナー(Plus One Project for Postgraduate Year 2 Seminar)が開催されました。本セミナーは、進路を決定する直前の初期臨床研修医2年目に産婦人科診療の魅力をもっとダイレクトに伝えることが目的です。第1回では分娩・胎児超音波・腹腔鏡手術・会陰縫合・NCPR・顕微授精のハンズオンセミナーを「さわり」に留まらず時間をかけて指導し、体験してもらいました。また、患者さん・主治医・司会者の対談形式の講演会では患者さんと主治医の生の声を届けました。技術指導に当たるのは全国から集まったやる気に溢れた若手医師たちです。参加者は、若手医師との交流を通して産婦人科専攻した自身の将来像を具体的に描くきっかけを作ることができます。136名の参加者からは「来てよかった」との多くの声を頂きました。



### 第2回POP2セミナー開催について

第2回POP2セミナーは2018年5月26日(土)～27日(日)に東京で開催予定です。現在若手委員がさらなる魅力的なプログラムを作成中です。リクルートの一つとして活用して頂ければと思います。開催のお知らせ配信をお待ちください！

## 第70回日本産科婦人科学会学術講演会

開催予 告  
会期 2018年5月10日(木)～13日(日)  
会場 仙台国際センター、東北大学百年記念会館川内秋ホール

仙台では第36回と第50回が開催されましたので今回が20年ぶり4度目となります。東日本大震災は東北に甚大な被害をもたらしました。特に太平洋沿岸では地震・津波とその後起こった原発事故からの復旧・復興がまだまだその途上にあります。震災の年には日本産科婦人科学会から石巻や気仙沼、宮古などの病院に人的支援をいただきました。その後も東北連合産科婦人科学会からの要請に応じていただき、福島県内の病院にはいまだに継続的に医師派遣をいただいております。今、感謝申し上げます。今回の学会ではそのような全国からの支援に応えるべく、また東北の元気を全国に発信すべく、プログラム内容と学会運営の充実に向けてまいりました。従来とは一味違う学会になる

ことを願っております。本集では、会長講演、特別講演、シンポジウムの講演・討論は原則日本語で行います。ただし海外からの参加者のために、日本語を英語に同時通訳します。さらに、海外からの参加者の質疑に備えて、英語から日本語への同時通訳も行います。また学会アプリは、例年同様演題検索アプリを用意します。今回より演題検索アプリ上で当日のランチョンセミナーのチケットを取得することが出来ます。International Workshop for Junior Fellows (IWF)では、テーマを「1. Cross-country differences in routine prenatal examinations」「2. Work-life balance for OB/GYN doctors: Pregnancy and parenthood with careers」としております。医学生フォーラムでは、「1.

### 学術講演会参加費優待

- ★ 医学生 ..... 無料
- ★ 初期研修医(非会員) ..... 3,000円
- ★ 初期研修医(会員) ..... 無料

※学生証、証明書をご提示ください。

▶全文はWEBサイトに掲載しています。ぜひご覧ください！



「産婦人科と他科を迷っている人」や「産婦人科にほぼ確定している人」を対象に、産婦人科の魅力が十分伝わり、不安要素があるのであればそれを払しょくする、というものです。これを実現するため、産婦人科の基本手技について指導するハンズオンセミナーと、参加者の疑問や不安を解消する種々の企画を準備しました。運営は未来委員会内の若手委員ワーキンググループが中心となっており、参加者への指導は全国から集まった若手実行委員40名が行いました。

1日目は分娩介助

# 第11回 産婦人科 サマースクール in かずさ

## 開催報告

2017.8.19 -20 木更津市「かずさアーク」

第11回サマースクールには、215名の医学生と初期研修医が参加してくれました。国際学会にも対応可能なかずさアカデミアパークに開催地を移し、申し分ない環境でセミナーが開催できました。

さらに、産婦人科医になった後の近未来が感じられるように、4つの企画が開催されました。どのブースでも活発な意見交換が行われていました。中でもメインホールで行われた男性企画では、男性産婦人科医を目指す参加者の背中をドンと押すような熱い一体感が見られました。

さらに、産婦人科医になった後の近未来が感じられるように、4つの企画が開催されました。どのブースでも活発な意見交換が行われていました。中でもメインホールで行われた男性企画では、男性産婦人科医を目指す参加者の背中をドンと押すような熱い一体感が見られました。



私は、学生時代から将来は産婦人科として働こうと考えていました。理由としては様々ありますがその一つに手技の多さが挙げられます。産婦人科はエコーや腹腔鏡など非常に様々な手技が必要とされている診療科です。研修医になり患者さんに対してその手技を施す機会が増えました。もちろんうまく行うには程遠く、上級医にご指導いただいています。サマースクールは実習がメインの日程です。普段あまり聞けないことも気兼ねなく聞け、普段抱えている疑問を解消できる良い機会でした。私のように手技の再確認の目的でも良いですが、これから産婦人科を回る方にとっては産婦人科の機器に親しみやすい機会になるのではないかと思います。

学生の頃から産婦人科になんとなく興味を持っていて、今後どの診療科に進むか悩んでいた際に、研修先の先生に勧められて参加しました。1日目はNCP、CTG、分娩、超音波の実習で、普段は後ろから見学していることの多いことを体感することができました。また、2日間共に過ごすグループで実習したためお互いの距離もすぐに縮めることができました。2日目の手術の実習では、腹腔鏡手術の練習で実際に鉗子を扱うこと、結紮・縫合の練習をすることなど、一つ一つ丁寧に指導していただきました。このサマースクールに参加して経験したことは、今後の研修においても勉強になりました。また産婦人科に興味を持っている学生・研修医と2日間も交流する機会はなかなかないので、みんながどんな考えなのか、どのようなことを意識しているのかを共有でき、非常にためになりました。若手の産婦人科の先生とも話す機会があり、今後自分が産婦人科に進んだ場合どのようなビジョンを得ることができました。このサマースクールを通して、産婦人科に進もうという思いが強くなりました。産婦人科に進もうと少しでも考えている方は是非とも参加してみてください！

(JA広島総合病院初期研修医・宇山拓澄)

私が産婦人科を志す理由は妊娠と出産を支えていく事にやりがいを感じるからです。医療従事者としておめでたい現場に立ち会える産婦人科は特別だと思います。その反面で研修中に危険な出産や悲しい結果になってしまった出産にも立ち会いました。すでに日本は世界的にも妊産婦死亡率や周産期死亡率が低い国ですが、未だに根治的な治療法のない疾患もあるのが現状です。今後はさらに安全な妊娠、出産ができるような医療の発展へ少しでも貢献したいと考えております。



妊娠と出産を支えていく事にやりがい

産婦人科は女性だけを対象とする科と言われることもありますが胎児を含めればそうではないと考えられます。新生児の長期的な健康状態の向上には妊娠の管理が非常に重要です。私は医師としてたくさんの方の事を勉強していかなくてはなりません。患者さんのことを常に思いやれるような医師であるよう励んでいきたいです。

獨協医科大学病院臨床研修医・和田善光

## 研修医の声

研修医の方々に、産婦人科を選んだ理由や、産婦人科に寄せる夢を語って頂きました。

私が産婦人科に興味を持ったのは、学生時代に分娩を見学したことがきっかけです。分娩や帝王切開のダイナミックさにとても感動したことを覚えています。様々な科をローテートする中で、手術などの外科手技をしたいと思うようになりました。手術によって状態が劇的に改善する患者さんを実際に見て、やりがいを感じたからです。学生時代から漠然と興味を持っていた産婦人科には、内科・外科両方の要素があり、自分にぴったりだと考え、産婦人科で専門医研修をすることに決めました。

私が産婦人科を選んだ理由

現在は専門医研修2年目で、周産期・腫瘍・女性医学・不妊内分泌のそれぞれの分野を総合的に学んでいます。患者さんが無事に退院できたり、ありがとうという言葉をもたらしたりしたときはとても嬉しく思います。女性のすべてのライフステージに関わることができ、責任とやりがいのある分野だと考えます。今後、知識と技術の向上はもちろんですが、常に一方的ではなく患者さんと悩みを共有しながら診療していける医師になれるよう研鑽を積みみたいと思います。



徳島大学 産婦人科・正木理恵

全文はWEBサイトに掲載しております。ぜひご覧ください！